Summary, 20 February,2019

日時：平成 31（2019）年 2 月 20 日　18:00～20:00
会場：東京外国語大学　語学研究所
「ロマニ語の世界 －ロマ（ジプシー）の言語と言語教育」
'The World of Rromani - the language and the language education of Rroma (Gypsies)'
発表者：角 悠介（ルーマニア国立バベシュ・ボヨイ大学日本文化センター所長、神戸市外国語大学客員研究員 / ロマニ語、ロマニ語教育）
SUMI Yusuke

講演では**１.「ロマニ語」という言語**について、そして**２．ルーマニアにおける「ロマニ語教育」について**、の二つが大きなテーマになっている。

まず初めに、講演者の経歴とロマニ語の関わりを述べた。講演者はルーマニア国立バベシュ・ボヨイ大学西洋古典学科学士課程に学び、ハンガリー国立ブダペスト大学西洋古典学科修士課程在学中に、学外でハンガリーのロマニ語方言を学ぶ。修了後、ルーマニアに戻り、国家教育省少数民族局ロマニ語専門官・ブカレスト大学ロマニ語学科教授 Gheorghe Sarău に師事しロマニ言語学を学び、博士課程では「トランシルバニアのロマニ語カルパチア方言」を研究した。博士課程修了後、ブカレスト大学ロマニ語学科で助教を務めた後、世界で 2 番目のロマニ語学科設立の命を帯びて母校のバベシュ・ボヨイ大学に戻り、現在文学部において選択科目でロマニ語を教え、同時にベラルーシ共和国のロマニ語方言の研究をしている。

自己紹介に続き、「ロマニ語」という言語の言語学における立ち位置について述べた。話者を包括する広義の「ジプシー（現在は差別用語として概ね「ロマ」に置き換えられる）」という名称が指す民族の定義の難しさについても述べた。ロマには「国」や「公文書」というものが存在しないため、アプローチの手法が必然的に文化人類学に寄り、定義に曖昧さが残る。ロマニ語話者の定義を「ロマニ語話者」とすれば問題はないが、そうもいかないので「ロマによって話されている言語」としているが、「ロマ」という名称と指し示す対象には常に議論が伴う。

次に、ロマニ語方言の分類について述べた。方言は地理的に分類されるのが常であるが、ロマニ語の場合、話者が近代まで放浪をしていたため、同じ町に系統の異なる方言を話す複数のロマグループが共存することは珍しくない。このため、ロマニ語方言に限っては、地理的な分類よりも歴史的な分類の方が有効であることを述べ、例としてフランスの INALCO のロマニ語研究の権威 Marcel Courthiade 氏による、主に音声変化に基づいた方言分類を紹介した。また、ロマニ語の純度について述べ、当然ながら純度が低い（他の言語の影響が強い）ほど、話者間での意思疎通が難しくなり、また判読には影響を与えた言語の知識も必要となることを述べた。

次に、世界のロマニ語方言をいくつか示した。配布資料に詳細があるが、ハンガリー、ロシア、ギリシア、コソボ、ルーマニア、フィンランド、イギリスのロマニ語文を文法的に説明し、同時に「ロマニ語に様々な表記法が存在する」ことを印象付けた。

様々な表記法があり、しかもそれらのほとんどが他の言語の表記法を真似ていることは近代の国際化社会において、民族団結に不利であった。そこで、「世界ロマ大会」という各国のロマの代表者（この定義も曖昧だが、今は議論をしない）が集まった国際会議において、「ロマニ語共通アルファベット」が UNESCO 代表者の立会いのもと制定された史実を述べた。第 4 回世界ロマ大会における **Decision: "The Rromani Alphabet"** (Warsaw, 1990.04.07)の第一項**「１．書かれたロマニ語は、小さなバリエーションを伴う単体であり、ロマは寛容さをもって、各々の方言に従ってそれを読むこととする。」**を紹介し、ロマの代表者たちが方言を否定することなく、書き言葉における「ロマニ語のゆるい表記統一」を目指していたことを伝える。

ここから、世界でもっともロマニ語話者が多く、講演者がロマニ語を教えているルーマニアの話に移る。ルーマニアでは国家教育省の承認（1991 年）により、上記の「ロマニ語共通アルファベット」がロマニ語を表記する正式なアルファベットとしていち早く導入された。他の欧州諸国同様、ルーマニアにも様々な少数民族が共存しているが、例えばハンガリー系国民は母語であるハンガリー語を学校で学び、ハンガリー語による教育を受ける権利を昔から有していたが、ロマにはこれがなかった。言語権の不平等である。そこで、後にブカレスト大学に世界で唯一の「ロマニ語学科」を設立する言語学者 Gheorghe Sarău によって、1991 年から 1994 年の間に国家教育省を通じて「標準ロマニ語」が小学校～高校までの正式な教育科目の一つとして導入される。

次に、この「標準ロマニ語」について述べた。ロマには国もなく、首都もない。ルーマニアには主に 4 つの方言が話されているが、その内の一つを「標準語」としてしまうと、争いになる。そこで、各方言話者から「平等に扱われる（＝平等に批判される）中立な教育言語」の必要性が生じた。そこで、**１．その教育によりロマニ語の純度が保たれ、２．国内外の様々なロマニ語諸方言への対応力に優れている**規範言語**「標準ロマニ語」**が制定される。上記の二つの目的から、必然的に「標準ロマニ語」は「古いロマニ語」に近づく。ちょうど、ロマンス諸語を理解するには、それぞれを個別に学ぶよりも、古い言語であるラテン語や俗ラテン語を学ぶ方が効率が良いのと同じである。

最後に「標準ロマニ語教育」における問題点を述べた。まず、学習者にはロマニ語を母語とするものと、ロマニ語を話さないロマやルーマニア人が含まれるため、特に最初は成績に差が出てしまうこと。そして、話者からの「標準語は我々の方言と異なる（＝我々の方言を教えよ）」という不満。これは、そもそも「言語教育」の理解不足であり、いかなる国でも規範言語と口語が一致しないことを知らないために生じる。同時に聞かれるのが「我々の方言を否定するつもりか」という意見。初等教育におけるロマニ語は、学習者のキャパシティーを考慮すると各方言の様々な変化形を紹介するわけにはいかないので、「推奨形」のみが教えられ規範とされる。ところが、大学では「標準ロマニ語」は多種多様のロマニ語方言を理解するための基礎言語に過ぎない。このように、標準ロマニ語は小学校から大学まで幅広い教育課程で教えられているために、「規範と基礎」あるいは「ゴールとツール」の二面性があるのだが、やはり進学率が決して高くはないロマの多くにとっては、「規範」の部分が大きく目に映ってしまい、「標準語帝国主義」を感じてしまうのだろう。

小学校のロマニ語の教科書や、ロマニ語で書かれた算数の教科書を紹介しながら講演を締めくくった。